

被災地派遣レポート〈第89回〉

財務局建築保全部施設整備第二課 山内 智さん

私は平成24年4月1日から平成24年9月30日までの半年間、東日本大震災による被災地支援を行うため、宮城県土木部営繕課に建築担当職員として派遣されました。

建物の被災状況に応じて、解体・修繕再利用・建替え等、災害復旧の手法が違う為、既に決定した方針を基に進行中の事案を引継ぎ、それぞれの施設について設計や工事を行います。

設計業務については、現地調査を行った上で問題点を勘案しつつ、各関係者との調整や被災地事情の今後を予測しながら、国庫補助金対応を含めた内容で設計を行います。

設計業務が完了している案件については工事を発注して工事監督を行い完了させ、検査を受け主管局へ引渡しを行います。

入札不調案件が多かった為に何度も緊急再起工を行い、また、複数案件一括工事発注や内部事務手続きの相違に戸惑いながらの発注業務、工事監督業務としては、赴任早々数々の工事打ち合わせを行うものの、聞き慣れない地名が飛び交う中では、何の案件でどこの話か訳が分からない状態でした。東京都という名前を背負った宮城県職員として、滞りなく業務を進めなければならない重圧をひしひしと感じながら過ごしていました。

被災した施設としては、地面がうねり壁がひびだらけの状態で開催している高校や、地下から1階床まで津波に飲まれ、とりあえず掃除して業務を継続している警察署、津波でお化け屋敷のようになり建替を待っている港湾倉庫、解体途中のような無残な姿の海岸沿いにある宿泊研修施設等、様々な状態です。



担当として出来る限りの事や自分だからこそ出来る事は、宮城県営繕課課員や委任部局の担当職員に進言・相談のうえ、利用者や使用者を第一に考えて業務を進めていましたが、

各施設によって状況や対処方法が違う事に加え、国の災害復旧補助金申請事業である事から担当としての裁量がかなり制限された一面もあり、関係各者との調整も含め非常に苦労しました。

しかし、被災地で一生懸命頑張っている方々から、「遠いところからわざわざ来て、直して頂いてありがとう」等と感謝されることもあり、微力でも復興の一部を担えていたのかなという思いです。

よく報道で目にする、赤い鉄骨の骨組みだけになった南三陸町防災庁舎から程近い高台にある県立志津川高校の復旧工事も担当案件の一つで、頻繁に現地へ行っておりました。初めて南三陸へ行った時の衝撃は言葉では表現できない程強烈でしたが、頭の中は冷静で「全て無くなったのか・・・」という感想でした。震災から1年以上経過しているにも係らず何も無い一面灰色の風景は、私にとって感情の起伏すら無くしてしまう情景でした。



高校の改修工事が完了した夏の後半、高校の敷地から見下ろす南三陸町志津川地域は空き地一体が雑草で覆われ豊かな緑一面の景色となり、昔から草原が広がっていた土地のように錯覚してしまう風景に変わっていました。この風景の変化のように、災害があったことを時間が忘れさせることの無いようにしなければなりません。

半年という短い期間ではありましたが、私は被災地支援業務を行ったことで災害に対する考え方や危機管理、地域社会の繋がりや助け合いの重要性、公務員としての使命を再認識致しました。一日でも早い復興を願うと共に、宮城県職員の方をはじめ今回派遣に関してお世話になった方々に感謝申し上げます。